

■ ジョウゼフ・コンラッド国際会議(ポーランド) 第6回大会

2016年6月20日から24日にかけて、ポーランドの都市、ルブリンのマリア・キュリー・スクウォドフスカ大学で開催された第6回ジョウゼフ・コンラッド国際会議に参加した。この学会に参加した日本人は、岩清水由美子先生、田中賢司先生、山本薫先生、そして今川の計4名。私にとっては実は今回が初めての海外であり、初めての国際会議だった。見るもの聞くもの、触れるもの一つひとつがとてつもなく新鮮で、わくわくの連続だった。

コンラッドが生まれ育った国、「ポーランドらしさ」に五感をフル稼働させて浸ってみたい！ポーランドに暮らす人々となるべく同じような日常を体験したい！そう思って、滞在中は早朝やお昼休みなどを利用して、ルブリン市内をたくさん歩いてまわった。石畳がずっと続くルブリンの旧市街地は、とても美しかった。街のいたるところで、山羊とブドウをあしらったルブリンの紋章と、ポーランドを表す鷲の紋章を目にした。季節柄、瑞々しい緑が溢れ、近くのサスキ庭園ではピンクや赤、薄黄色のバラが、花卉の奥に朝露を湛えたまま咲き誇っていた。ベリー類や房つきのブドウを売るスタンド、アイスクリームの店、そして色鮮やかな花々を売るスタンドが、多く目に付いた。そこここに大聖堂や教会があり、鐘の音がゆるやかに、そして厳かに過ぎ行く時間の流れを告げる。修道士や修道女もよく見かけた。今回の国際会議のオープニングセレモニーの会場となったルブリン城も見学すべきものがたくさんあった。礼拝堂の壁と天井は一面、新約聖書のエピソードを再現したカラフルで柔らかいタッチの壁画と天井画に覆われている。天井近くに取り付けられた窓からぼんやりと差し込む日差しが、薄暗い礼拝堂の室内を神秘的に照らし出して、物語性豊かな壁画や天井画を浮かび上がらせていた。夜も9時くらいまで明るいため、その日の研究発表が終わると、地元の人々が利用している大型スーパーへ足を伸ばし、現地でしか売っていないカップ麺やスープ、お惣菜を買い込んで、ホテルで舌鼓を打ったりもした。

研究発表は Section 1 と Section 2 に分けて、同時進行で朝9時から夕方6時くらいまでみっちり行われていた。発表者の順番や発表時間は、事前

に知らされてはいるものの、当日、諸事情により急遽、大幅に変更になったりするのが当たり前のようだったため、戸惑ったり焦ったりすることもあった。とりわけ興味深かった研究発表が二つあった。一つ目はゴシックのモチーフを取り入れた短編“The Black Mate”の語り注目したポーランドの研究者 Jacek Mydla 氏による *Spiritualism, Utilitarianism and Spectral Narration in “The Black Mate”* である。Mydla 氏はナラティブのなかに現れる弁証法的沈黙に着目し、このような語りのモードや沈黙、語り手の声こそが本短編中で最も幽霊じみた存在として表現されている、と分析していた。また、もう一つはアメリカの研究者 Padmini Mongia 氏の *Two Kings of Cannibals: Eating and Gender in Conrad* である。こちらは *Lord Jim*、*“Falk”* そして *“Heart of Darkness”* に描かれる「食べる」という行為に着目し、そこからジェンダーや人種の差異に対する理解を深めようと試みる発表だった。私自身が、コンラッド小説に描かれるカニバリズムというモチーフに深い関心があるため、Mongia 氏の考察は大変面白く感じた。岩清水先生は *Reflections on Marlow’s Misogynistic Statements in Chance*、田中先生は *On the Maritime Tradition of Conrad and Education in The Shadow-Line*、山本先生は *La Folie Almayer: Madness in Conrad and René Magritte* そして私は *Neutrality as Gambling in “The Tale”: The First World War as Modern Capitalistic Business* という題目でそれぞれ研究発表を行った。今回発表してみて強く感じたのは、海外の人のディスカッション能力の高さである。質疑応答の時間の熱気には、圧倒されるものがあった。私自身、発表後に質問を受けたが、一個人としての思考力や意見を求められるような種類の質問だったため、その場で即座に何らかの返答をするのに四苦八苦した。そもそも、発表者や質問者の英語を聞き取るのにかなり手こずってしまった。飛び交う英語の早さ、滑らかさといったら、それはもう想像以上だった。様々な国出身の人々が、第二言語としての英語を話すわけだから、抑揚や訛りがいかになく発揮されており、個性豊かな英語の洗礼を受けた。「生の英語」に触れるってこういうことなんだ！と衝撃を受けた。また、研究書の著者として知っていた著名な研究者の方々が発表しているのを目の当たりにしたり、一緒に食事をしたり、お話ししたりするのは、不思議な感覚だったし、大いに刺激を受けた。それに、同世代の研究者と知り合いになれたのも本当に

嬉しかった。とりわけ、トルコのアンカラから姉妹で参加したという Nergis とは、話が弾み連絡先を交換した。今も時折メールをやり取りしており、「いつかお互いの国を訪問しあって再会しよう！」と約束している。

数日間の滞在だったが、ポーランドを発つ頃には「ジェン・ドブリィ（こんにちは）」「タク（はい）」「ニェ（いいえ）」「ジェンクイエエン（ありがとう）」など、ポーランド語を数種類覚えることができた。それが嬉しくて、土産物店やスーパーのレジ、ショパン空港などで、得意満面で「ジェンクイエエン！」と言ってみたところ、温かみの溢れた笑顔と親しみのこもった眼差しが返ってきた。

Mr. Conrad、ジェンクイエエン！！数年後、今よりもっと成長した自分になって、また再びあなたの生まれ故郷、美しいポーランドを訪れ、国際会議に参加します！！

（いまがわ きょうこ 九州工業大学 非常勤講師）



写真1 ルブリン城



写真2 ルブリン城中庭

学会報告 (ポーランド)



写真3 広場



写真4 旧市街への入り口、
クラクフ門

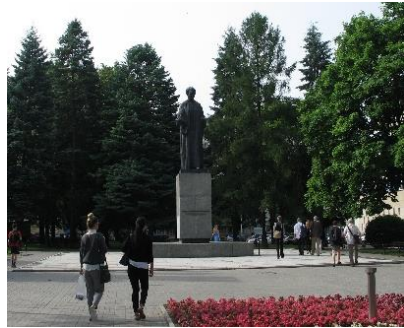


写真5 キャンパスのマリー・
キュリー像



写真6 山羊のモニュメント



写真7 絵画『ルブリン合同』(1869)の
前でオープニングセレモニー